

AG-HMC155 ユーザーズレポート

今回スタジオDUさんの協力でパナソニックのAG-HMC155を使って河崎実監督作品『地球防衛ガールズP9』という作品を撮影しました。

この作品は、特撮怪獣映画の大ファンで自主映画として発表した『地球防衛少女イコちゃん』以来、美少女と怪獣にこだわりつづけている河崎監督の集大成とも言える作品です。

現在、東北地方を襲った大地震の余波で全ての経済活動が停滞している中で、映画制作の資金繰りもかつてないほど縮小され、インディーズ映画に至ってはノーバジェットに近い状況にあります。そんな中で制作された『地球防衛ガールズP9』も、多くのボランティアに支えられてなんとか映画としての体面を保った作品です。機材協力していただいたスタジオDUさんを始め、協力していただいた皆さまにあらためてお礼申し上げます。□

さて以上のような理由から今回の映画は、少人数ゲリラ撮影という自主映画の原点に立ち返ったスタイルで制作されています。つまり監督・制作・助監督・撮影・照明・スチール・メイキング（兼監督助手）の7人が現場のオール・スタッフです。録音はオール・アフレコとし、移動は全て電車移動□（着ぐるみ搬入等で若干車輛も使用）、俳優のメイクも基本は自分でやる（時々まメイクの応援がありました）という学生映画のようなノリでした。□

そこで活躍したのがAG-HMC155の機動性です。ごつい外見に反してテープ機動メカを持たないボディは実に軽く、それでいて業務用に比しても遜色ないクオリティを持っているのですから、今回のような撮影にはピッタリです。

ロケセットも狭い屋内が大半なので、この段階で業務用カメラの入る余地はありませんでした。それとこれは業務用カメラに慣れたプロのカメラマンには大事なことなのですが、アマチュア向けの民生用カメラはやたらとオート機能が多く、カメラの方で勝手に補正をやらかしてくれるのを防ぐのが難しかったりします。

その点AG-HMC155は、そういったオート機能を全て解除する設定があるので大助かりです。側面スイッチ類も業務用と似た配置になっているので、誤ってスイッチを押したりすることもなく、トラブルなしの撮影ができました。間違いなく記録されているという撮影の基本に対する重責が、これまで助手任せにしてきた撮影監督にとっての一番大きな負担でもあるからです。テープ収録と違いSDHCのメモリーカード収録も現場チェックの利便性が良く、いくらチェックしても誤って消す心配がないので助かりました。

今回河崎監督から事前に要望されたのは「実相寺で」ということでした。つまり河崎監督が尊敬するウルトラマンの父と言われた故実相寺昭雄監督の映像スタイルで撮って欲しいということでした。

実相寺監督のスタイルは、超ワイドな魚眼映像とスピーディな移動ショット、シルエットや陰影の強調、イマジナリーや繋がりを無視した斬新な人物配置等々、映像主義ともいえる実験的な手法です。魚眼と移動に関しては今回の装備では不可能（ワイド撮影に関してはワイドアタッチメントの使用も考えましたが、AG-HMC155は広角端が35mm換算で28mmに匹敵するワイド・ズームなのでそのまま使用しました。

正直いうと実相寺監督の魚眼レンズは映像がグドすぎて嫌いなのです）なので、もっぱらシルエットや陰影の強調と人物配置に工夫を凝らしました。照明の佐熊さんとは事前の打ち合わせで、持ち運びに便利な蛍光灯照明で行こうという理解があったので、屋内では色フィルターによる色彩の強調と屋外ではあえて色温度をノーマルにしない手法を取っています。アンバーのフィルターごしにホワイトを取ってブルーにしたり、

AG-HMC155 ユーザーズレポート

プリセットのタングステンで撮影したりしています。こういう正攻法でない撮影は僕自身大好きなので、その意味ではこれまでにないほど楽しませてもらった現場でもあります。

カメラの基本設定は、Dレンジ優先のCINE-LIKE-Dといった映画撮影に適したガンマ設定を選んでいますが。白が飛ばず黒が沈まないこの設定は、編集時の調整に適していると判断しての選択でしたが、現場でのモニター確認以上に階調豊かな映像が撮れていたのが驚きでした。現場ではちょっと暗かったかなと心配した映像も、しっかりとディテールが残っているので簡単なゲインアップでバランスが取れた上に、ノイズも気にならないレベルだったので助かりました。これはPHモードというビットレートの高い記録モードの影響も大きいと思います。

記録モードは1080/24Pで撮影しています。今回は地方向けの予告編以外はプリントしないということなので、映像はデジタル上映前提でカラコレしました。

最後にスタジオDUさんから機材をお借りしたとき、大容量のバッテリーがなかったので、こちらで手配した大型バッテリーを使用したのですが、本体との接触が不安定で、手持ち撮影中にバッテリーに触って2度ほど停止することがありました。撮影後半に別メーカーのバッテリーを購入したところなんの問題もなかったのですが、機材との相性なのか个体差の問題なのか判断に苦しむところです。いずれにしろパナソニック純正のバッテリー以外を購入するときは、本体に取り付けてのチェックが必須だということです。

シネマトグラファー／須賀隆（すがたかし）

1953年生まれ。東京写真専門学校卒業後、写真家長野重一に師事してCFやTV映画の撮影に参加。

84年に一本立ちしてミュージック・クリップやPR映画の撮影に従事。

91年に『爆BAKU!』で劇映画デビュー。

『日本以外全部沈没』（06年）や『ギララの逆襲／洞爺湖サミット危機一発』（08年）など河崎実監督とのコラボが多い。

映画秘宝や月刊HiViなどにレビューを寄稿する映画ライターとしても活動。□